



国語，数学，理科(化学，生物)問題

はじめに，これを読みなさい。

1. これは，国語，数学，化学，生物の4科目の問題を綴じた冊子である。必要な科目を選択して解答しなさい。食料環境政策学科受験者は「国語」が必須である。
2. 問題は，数学，化学，生物については表面から81ページ，国語については裏面から16ページある。ただし，ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
3. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか，受験票と照合して確認すること。
4. 監督者の指示にしたがい，解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5. 監督者の指示にしたがい，解答用紙にある「解答科目マーク欄」に1つマークし，「解答科目名」記入欄に解答する科目名を記入しなさい。なお，マークしていない場合，または複数の科目にマークした場合は0点となる。
6. 解答は，すべて解答用紙の所定欄にマークするか，または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答番号は各科目の最初に示してある。
7. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
8. 解答は，必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
9. 訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
10. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
11. 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず，必ず提出すること。
12. この問題冊子は必ず持ち帰ること。
13. マーク記入例

良い例	悪い例
	

国語問題

はじめに裏返して表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. この問題は 16 ページあります。
2. 解答番号は 1～17, 101～108, 201 です。
3. 数学・化学・生物は裏面から順にあります。

国語

(解答番号は1～17、101～108、201。記述式の解答は解答用紙に横書きで記入すること。)

〔I〕

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。解答番号は1が

101

、2が

102

1 ケンアンの事項について話し合う。

2 ショカツの警察署に届け出る。

〔II〕

次の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。解答番号は1が

103

、2が

104

1 有職故実に則る。

2 食材が払底する。

〔III〕

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「知識はどこに宿るのか」という問いは、「ナイアガラの滝はどこにあるのか」という問いよりは、「この国の正義はどこにあるのか」といった問いにずっとよく似ている。それは、知識が正義と同じように、この世界に実在する物体や生物のような、実際に手にとって触れることのできる存在ではないからである。「ナイアガラの滝」や「チューリップ」という言葉が指しているものが、現実存在しているか、あるいは存在していた(または存在するであろう)個物であることは、誰もが認めるに違いない。個物というので不足があれば、個物の集まりが指されているかもしれない。ところが「知識」という言葉は、そうした実在する物

を指しているとは思えないのである。

このようなことは、われわれの生活を取り巻くじつに多くのものに当てはまる。あなたとあなたの恋人とのあいだに生まれた愛が、ナイアガラの滝のように地球上の空間を占めることなどないのだし、国家の正義が、誰かの上着のポケットに入っているということもない。知識が物体ではないことは、じつはありふれたことかもしれない。それでも知識は、愛や正義と比べても、人間の存在にとって欠くことのできない格段に重要な意義を持ったものだと言える。どのような意義なのか。

「冬山の気象条件についての知識がなくて、太郎は遭難した」と、太郎の冬山での遭難について誰かが論評したとしよう。このような「知識」という言葉の典型的な使い方から、どんなことが分かるであろうか。ここから、「知識とは何であるのか」についての一般的で厳密な答えを読み取ることができると期待するのは、ちよつと行き過ぎかもしれない。しかし、知識に帰せられている基本的な特徴のいくつかが、この日常的な言葉の用法のなかに現われていることも、確かである。

太郎はどんな知識を持っていなかったのかについて、この論評は述べている。「冬山の気象条件」についての知識を、彼は持っていなかったのだ。通常知識が問題になるとき、その知識は、どんなものであれ「何か」についての知識なのである。太郎が持っていればよかった知識とは、「この地方の山岳地帯では晴天は三日と続いたことはない」とか「太郎の出発した当日の気圧配置は悪天候へと向かうものだった」ということについての、知識だったのである。

太郎がこのような知識を持っていれば、遭難する以前に、もう一つ別の状況が太郎には開かれていただろう。つまり、晴天が続きそうだから登山ができそうだという状況ではなく、晴天は続かないかもしれないから登山はできそうにない、という別の状況が可能性として開かれていたのである。だから知識は、人間が環境のなかで行動を起こそうとするときに、²どんな行動ができるかについての世界の可能性(状況)を開くという役割をなし、それゆえにこそ、人間が人間らしく生きてゆくのに欠くことのできないものである。

太郎に欠けていたのは、山岳の気象がどのように変化するかを予測するというような、自分を取り巻く自然環境についての知識であった。この場合、問題になっている知識は、自然を対象とし、法則に基づいた予測をなし、かつその法則を自然科学的

続きによって獲得したものであろう。だがあらゆる知識が、自然を対象とし、予測をし、自然科学的手続きによって得られたもの、であるわけではない。例えばわれわれは、五〇〇年前の日本の土地制度について、歴史的な知識を持っているかもしれない。この場合の知識は、過去の制度についての、記述的な、歴史学的手法によって得られたものである。あるいはまた私は、自分の性格について、経験的記憶によって得られた知識を、予測あるいは記述として持つかもしれない。どうも自分はささいなことでも激しやすい、などなど。

このように、何を **ア** とした知識であるのか、どんな **イ** をする知識であるのか、どんな **ウ** によって得られた知識であるのか、に応じて知識にはじつにさまざまナリエーションが存在する。そのなかには、「ポストが目前にある」とか「赤信号は止まれの合図だ」などのような、きわめて身近な環境世界への基本的な理解も含まれるであろう。こうした常識的な理解は、知覚や、幼児期からの教育を通してわれわれの身に備わってきたものであつて、これなしにはわれわれは一瞬たりとも環境世界を生き抜くことが不可能になってしまうものである。目の前にポストがあることを知らなければ、歩行者は道を歩くたびにポストにぶつかつてしまふかもしれない。

これまでに知識についておおよそ分かつたのは、つぎのようなことであろう。知識とは、知識の対象である世界——このなかには、自然も歴史的な過去も自分や他人のことも、さまざまものが含まれる——に関するものであり、予測や記述のようなんならかの働きをするものであり、知覚や学問的手続きによって獲得されるものであり、そうしたものとして、ある主体に備わるものである。

知識が、環境世界を生きてゆく太郎のような主体に備わるものであることは、先ほどの太郎への論評が教えてくれている通りである。しかしこれだけでは、「知識はどこに宿るのか」という問いに、本当に答えたことにはならない。知識は主体のうち、どんな形で備わっているのだろうか。それは記憶として貯えられている何かなのだろうか、あるいは、もつと違った何かなのだろうか。

3 知識が心の中にある鏡像であるとか、記憶として貯えられているという見方は、不十分ではあるのだが、知識がどこに宿るの

かを正確に定めるための大きな手がかりを与えてはいる。

A 知識が世界を映す鏡像であると考えたくなるのは、知識とは世界の事実があるがままに間違ひなく描写したものだという直観があるからであろう。知識は、その対象に関して正しく何ごとかを伝えているはずのものだ。太郎が持つべきだった山岳気象の知識は、冬山の気象条件がどのようになっていくのかについて、正しいものでなければいけないのである。「この地方の山岳地帯では晴天は三日と続いたことはない」というのが正しくないなら、これを知識と呼ぶことは不可能である。正しくない知識に、知識としての資格はない。

B 知識が記憶として貯えられていると考えたくなるのは、知識の内容が、主体の行動に応じて適用されるべく、すでに主体のうちに保持されているという事態からくるのだろう。「スペインの首都はどこか」とたずねられて、「マドリッド」と答えられる用意のあることが、知識を持つということであろう。冬山での雲行きを見て、それがどのような気象状況をもたらすかを正しく予測でき、それに応じた行動をとる用意があるということが、知識を持つことであろう。

C このように知識が、適用されるべく主体のうちで一定の「構え」をなしていて、しかも正しさを含んでいるということを考慮しながら、これまでの問いに答えるなら、知識は主体の「信念」に宿りその信念が正しいということこそが知識なのだ、とすべきだろう。ある主体が世界に関して、「○○は△△である」ということが本当にその通りだという信念を持ち、その信念が正しいことが知識だということになる。

知識が信念に宿るのだということを、もう少し別の角度から確かめておきたい。それは、知識の担い手として「表象」⁴を候補に挙げる発想と、ここまでの結論とを対比してみることである。

視覚や聴覚に代表される知覚によって、外界から経験的な知識が獲得され、このような知識こそがあらゆる知識の基礎になるという考え方を徹底してゆくと、知識の究極の要素としての「表象」という存在が要請される。例えば、Aという人間とBという人間が同一の事物(例えばポスト)を見ているとする。しかし厳密に言えば、二人は同じ事物について厳密に同一の経験をするということとはありえないだろう。AとBとは、彼らの立つ位置や周囲の状況が異なっていれば、同じ事物についてまったく異なる

経験をするのである。彼らは、光線の具合で、まったく違った色合いのポストを見るかもしれないのである。もし彼らが同じ位置、同じ状況でそのポストを見ることが可能だとしても、視力や色覚異常の有無といった彼らの生理学的条件がまったく同一であることはありえないだろう。だからAとBとは、同一の物体を、彼らを取り巻く内外の状況に応じて異なった現われとして見るのである。ここで言うそれぞれの知覚の主体に生じる現われが、「表象」であって、この「表象」において、物質的な外的世界についての情報がわれわれに直接与えられてくる、と考えられるわけである。

このように考えれば、幻覚や錯覚がわれわれの経験のうちに存在することを、うまく説明できるように思われる。例えば、自分の殺したダンカン王の姿を見たマクベスのことを考えてみよう。マクベスは現実に存在するダンカン王を見たのではない。しかし彼は、実在する人物とは違ふ何かを見たのであり、そうでなければ「幻覚を見た」ということを彼に関して言うことはできないであろう。そこで、「見られた何か」としての「表象」が要請される。正常な知覚にせよ幻覚のような異常な知覚にせよ、何ものが表象として知覚主体の心のうちに現われているのであって、このように現われを所有する点では、知覚も幻覚もなんら変わることはないのである。

だが一方で、「自分の殺した王の幻覚」をマクベスが持つことと、われわれが正常に「ポストを知覚することのあいだには、その正しさについて大きな違いのあることを認めざるをえない。一方はありもしない事物についての正しくない情報を与えるもの、他方は正しく事物の情報を与えてくれるもの、という区別をわれわれははっきりとなしているのである。表象としては同じ身分であるはずの知覚と幻覚とが、知識の身分としてははっきり区別されることを、どのように理解したらよいであろうか。

つぎのような答えが、すぐにも思い浮かぶだろう。知覚とは実在するものについての表象であるがゆえに正しく、幻覚は実在しないものについての表象であるがゆえに正しくない、と。しかし、実在しない事物についての表象を持つことが、そのまま知識として正しくない表象を持つことを意味するだろうか。そうではない。⁵ 実在しない「一角獣」について想像をいくら巡らせても、その想像が正しくないという、知識に関しての評価が生ずるわけではない。そして、実在しない事物について、想像上の表象を単に所有することが「正しさ」に無関係であるのだとすれば、同じように幻覚の表象についても、それが単なる表象である限

り、知識に特有な「正しさ」をそれに関係づけることはできない。したがって、知覚と幻覚との知識上の差異は、それぞれの表象が実在に対応するものであるか、ということには存しないことになる。

にもかかわらず、マクベスに現われる幻影は単なる想像ではなく、むしろ正しくない認識なのである。そしてこのことを説明するには、マクベスの幻覚の経験が、ダンカン王の表象とダンカン王の存在に関する信念とを両方含んだものだと考えるよりほかに道はない。マクベスは、単にダンカンの幻影を表象として経験しているだけではなく、その表象に基づいて「ダンカンが目の前にいる」という信念を宿しているからこそ、正しくない認識を持つのだ。正確に言えば、正しくないのは彼のその信念なのである。そうであればこそ、彼は幻のダンカンに切りかかってゆくのであり、その行為が、「ダンカンが目の前にいる」という彼の信念の証拠になるのである。以上のような理由から、知識は主体の信念に宿る、という考え方が、現代の多くの哲学者によって支持されることになる。

(門脇俊介『現代哲学』「知識はどこに宿るのか」より)

〔註〕

○マクベス……ダンカン王とともに、シェイクスピアの戯曲『マクベス』の登場人物。ただし、シェイクスピアの原作と本文の記述とは必ずしも一致しない。

問一 傍線部1「人間の存在にとって欠くことのできない格段に重要な意義」とあるが、知識がそのような「意義を持つ」とされる

のはなぜか。その理由を本文に即して説明したものを次の中から二つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は二つと

も 1

- A 知識は手に触れることのできないものだが、愛や正義と同様に、豊かな精神世界を実現するために不可欠であるから。
- B 知識は行動を起こそうとする者に対して選択肢を提供し、より適切な判断に基づく行動を可能にするから。
- C 知識は身の回りの状況に関する基本情報を与え、日常生活を送るために不可欠な基盤を与えてくれるから。
- D 知識は正しさに対する信念をもたらし、困難な状況に立ち向かうための「構え」をもつことを可能にするから。
- E 知識は幻想や錯覚によって惑わされることから人間を守り、正しい認識の前提として欠かせない役割を果たすから。

問二 傍線部2「どんな行動ができるかについての世界の可能性(状況)を開く」とあるが、次の文のうち、知識の有無が行動や状況に影響を与えたことを述べているものはどれか。該当するものを二つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は二つとも 2

- A その法令について何も知らなかったために、違反をしてしまった。
- B 妥協を知らない性格が災いして、大損をしてしまった。
- C 私の与り知らぬことだったので、何も言わなかった。
- D 店長と知り合いだったおかげで、アルバイトにうまく採用された。
- E 増税が決まったと知り、急いで自動車を購入した。

問三 本文中の空欄 ア と イ と ウ に入る言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号をマーク

しなさい(それぞれの選択肢は一回のみ使用できることとする)。解答番号は、 ア が 3 、 イ が

4 、 ウ が 5

A 必要 B 発想 C 決定 D 行動 E 制度

F 機会 G 対象 H 区別 I 手続き J 働き

問四 傍線部3「知識が心の中にある鏡像であるとか、記憶として貯えられているという見方」とあるが、次の文は、そのよう

な知識の「見方」についての、本文に即した説明である。この文の二つの空欄に入る適切な言葉を、本文中の段落 A

C の範囲から、それぞれ三文字以内で抜き出して記入しなさい。解答番号は、 a が 105 、

b が 106

「知識は世界を映す心の中の鏡像である」という見方は、知識が本来的に a を備えたものである、という考え方

に基づいている。また、「知識は記憶として心の中に貯えられている」という見方は、与えられた状況に対する何らかの

b がある、という一種の「構え」として知識を理解する考え方に基づいている。

問五 傍線部4「表象」について、本文においてこの言葉と同じ意味で用いられている言葉を、三文字以内で抜き出して記入しな

さい。解答番号は 107

また、次のA～Eのうち、筆者の考え方において「表象」に分類されないものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解

答番号は 6

A 知覚 B 幻覚 C 信念 D 想像 E 幻影

問六 傍線部5「実在しない「一角獣」について想像をいくら巡らせても、その想像が正しくないという、知識に関しての評価が生ずるわけではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 7

A 「一角獣」についていくら想像を巡らせてみても、現実の世界を探求することなしには、それが正しい表象であるかを確かめることはできない、ということ。

B そもそも「一角獣」は実在しないのだから、「一角獣」についての想像が、間違った想像であると判断することはできない、ということ。

C 「一角獣」が実在していなくても、「一角獣」について想像することは可能であり、それを間違った行為であると評価することはできない、ということ。

D 実在しない「一角獣」について想像を巡らせること自体が誤った行為であり、「一角獣」についての正しい想像は存在しない、ということ。

E 「一角獣」が実在しないとしても、「一角獣」について想像を抱くこと自体が、間違った知識を持つことになるわけではない、ということ。

問七 傍線部6「その表象に基づいて「ダンカンが目の前にいる」という信念を宿しているからこそ、正しくない認識を持つのだ」

とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解

答番号は

8

A 知識とは、自分の認識に対する信念を含むものであるが、「ダンカン」の表象には、そのような知識による裏付けがない、ということ。

B 正しくない認識とは正しくない信念のことであり、幻のダンカンに切りかかるといふ行為は、マクベスの信念が正しくないことへの証拠である、ということ。

C 「ダンカン」の表象は幻覚だったのだが、ダンカンが目の前にいるという思い込みのゆえに、マクベスはそのような表象を持つてしまった、ということ。

D 実在しない「ダンカン」の表象に加え、それが現実であるという信念を持つことよつて初めて、マクベスは幻覚を見ていることになる、ということ。

E 「ダンカンが目の前にいる」といふ信念を持っていたからこそ、マクベスはダンカンに切りかかるといふ過ちを犯してしまつた、ということ。

問八 次のA～Eのうち、本文の内容と一致しないものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

9

A 知識の基本的な特徴の一つとして、何らかの方法によって獲得されるものである、ということが挙げられる。そしてその方法には、学問的な方法だけでなく、日常的な知覚経験や教育なども含まれる。

B 知識の知識たるゆえんは、世界を間違いないく描写しているということと、それがまさに正しい描写であるという信念とにある。そしてそのいずれの要素が欠けていても、知識としての資格は認められない。

C 人がどのような表象を持つかは、物理学的条件や生理学的条件によって千差万別である。したがって、実在する同一の事物であっても、異なる人間がそれについてまったく同一の表象を持つということとはありえない。

D 知覚と幻覚は、何か心のうちに現われるという点では同じであるが、正しい情報を与えるかどうかという点において明確に区別される。したがって、両者を表象という同じ身分のものとして捉えることはできない。

E 幻覚と想像は、実在に対応しないという点では同じであるのに、前者だけが「正しくない」と評価される。したがって、実在への対応の有無だけでは、「正しさ」に関する評価は成り立たない。

〔IV〕

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

東山の麓、鹿の谷と云ふ所は、うしろは三井寺につづいて、ゆゆしき城郭にてぞありける。俊寛僧都の山庄あり。かれに常は寄りあひ寄りあひ、平家ほろぼさむずるはかりことをぞ廻しける。或時法皇も御幸なる。故少納言入道信西が子息、静憲法印御供仕る。その夜の酒宴に、この由を静憲法印に仰せあはせられければ、「あなあさまし。人あまた承り候ひぬ。ただ今もれきこえて、天下の大事に及び候ひなんず」と、大きにさわぎ申しければ、新大納言けしきかはりて、さつとたたれけるが、御前に候ひける瓶子を、狩衣の袖にかけて、引倒されたりけるを、法皇、「あれはいかに」と仰せければ、大納言立帰つて、「平氏倒はれ候ひぬ」とぞ申されける。法皇多つばにいらせおはしまして、「者ども参つて猿楽仕れ」と仰せければ、平判官康頼、参りて、「ああ、あまりに平氏のおほう候に、もて多ひて候」と申す。俊寛僧都、「さてそれをばいかが仕らむずる」と申されければ、西光法師、「首をとるにしかず」とて、瓶子のくびをとつてぞ入りにける。静憲法印あまりのあさましさに、つやつや物も申されず。返す返すもおそろしかりし事どもなり。

〔平家物語より〕

〔註〕

- 鹿の谷……現在の京都市左京区鹿ヶ谷付近。
- 僧都……僧正に次ぐ僧官。
- 法皇……後白河法皇。
- 法印……法印大和尚位の略。僧の最高の位。
- 新大納言……藤原成親。
- 瓶子……細長い徳利。
- 判官……檢非違使の第三位。

問一 傍線部1「この由」の指す内容を、本文中から十五字以内で抜き出して記入しなさい。解答番号は 201

問二 傍線部2「仰せあはせられけれ」と傍線部4「大きにさわぎ申しけれ」の主語にあたる人物を、それぞれ次の中から一つずつ

選び、その記号をマークしなさい。解答番号は傍線部2が 10、傍線部4が 11

A 俊寛備都

B 法皇

C 静憲法印

D 新大納言

E 平判官康頼

F 西光法師

問三 傍線部3「人あまた承り候ひぬ」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答

番号は 12

A 人が大勢、集まっております

B 人が大勢、驚いております

C 人が大勢、うかがっております

D 多くの人が承諾しております

E 多くの人が伝え聞いております

問四 傍線部5「法皇多つばにいらせおはしまして」とあるが、その理由の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、

その記号をマークしなさい。解答番号は 13

A 法皇が新大納言の戯れ言を愉快に思ったから

B 法皇が新大納言の言い訳を不愉快に思ったから

C 法皇が新大納言の行為を不思議に思ったから

D 新大納言が法皇の機嫌を取ろうとしたから

E 新大納言が法皇の虚栄心をくすぐったから

問五 傍線部6「仕れ」は誰に対する敬意を表す言葉か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解

答番号は 14

A 俊寛僧都

B 者ども

C 静憲法印

D 平判官康頼

E 法皇

F 新大納言

問六 傍線部7「多」を漢字に直しなさい。解答番号は 108

問七 傍線部8「首をとるにしかず」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番

号は

15

- A 首を取るの忍びない
- B 首を取るの不可能だ
- C 首を取るの難しい
- D 首を取るまでもない
- E 首を取るの一番だ

問八 傍線部9「あまりのあましましさに、つやつや物も申されず」とあるが、その理由として、最も適切なものを次の中から一つ

選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

16

- A あまりにも大胆な陰謀が画策されていたから。
- B 人の死を冗談の種にして、もてあそんでいるから。
- C 法皇の御前であるにもかかわらず、皆がその事をわきまえていないから。
- D 重大な席にもかかわらず、皆があまりに浮かれた様子でいるから。
- E 重要な会議であるにもかかわらず、酒を飲むことをやめないから。

問九 次のA～Eのうち、本文の内容と一致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

17

- A 俊寛僧都は、本当に平氏を倒せるのか、内心不安である。
- B 静憲法印は、平氏が滅亡してしまうのではないかと恐れている。
- C 西光法師は、瓶子のくびを折り取って引っ込んでしまった。
- D 新大納言は、怒りにまかせてわざと瓶子を倒してしまった。
- E 平判官康頼は、酒を飲んだ勢いで猿樂を舞って法皇にたしなめられた。

